

1. 文学部・文学研究科

I	文学部・文学研究科の研究目的と特徴	・ 1 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	・ ・ ・ ・ ・ 1 - 4
	分析項目 I 研究活動の状況	・ ・ ・ ・ ・ 1 - 4
	分析項目 II 研究成果の状況	・ ・ ・ ・ ・ 1 - 7
III	質の向上度の判断	・ ・ ・ ・ ・ 1 - 9

I 文学部・文学研究科の研究目的と特徴

1. (目的と基本方針) 名古屋大学の研究目的は「真理を探究し、世界屈指の知的成果の創成によって、人々の幸福に貢献する」ことである。

これを人文学の分野に展開することにより、文学部・文学研究科では、「人文学の分野における深い学識と卓越した能力の追求を通して文化の進展に寄与する」ことを研究目的として設定している。また、これに基づいて、「研究成果の体系性を問い、未来に向かって持続的に知的財産を蓄積し、人文学における総合研究組織としての充実をめざす」という基本方針のもと、研究活動を推進している。

2. (目標と方針) 文学部・文学研究科では、研究に関する主たる目標として、次の2つを掲げている。

① 基幹の総合大学にふさわしい学術的成果を産み出す研究拠点を形成する。

② 研究成果を幅広く社会に還元する。

こうした目標を達成するため、以下のような方針に基づいて研究活動を推進している。

(1) 高度な研究を推進する。(中期目標M10 - 中期計画K31 と対応)

中期目標M10

人文・社会・自然の各分野で国際的及び全国的な水準で研究活動を行っている研究者を確保し、世界最高水準の学術研究を推進する。

中期計画K31

人文・社会・自然の各分野で基礎的・萌芽的研究の進展を図る。

(2) 高度な学術研究の成果をあげるための組織と環境を整備する。(中期目標M13 - 中期計画K40 と対応)

中期目標M13

高度な学術研究の成果を挙げるための組織と環境を整備する。

中期計画K40

学部・研究科・附置研究所・センター等の研究実施体制を継続的に見直し、必要に応じて弾力的に組織の統合・再編、新組織の創設を進める。

(3) 長期的な視野に立ち、研究資源の適正な配分を行う。(中期目標M15 - 中期計画K46 と対応)

中期目標M15

国際水準の研究を維持し発展させる分野に対して、重点的な資源投資を行う。

中期計画K46

中核的研究拠点グループに対し、重点的な研究の資源配分を行う。

(4) 人文学各分野に即した適切な研究評価指標により、自己点検および第三者評価を実施し、次期の計画に反映させるシステムを整備する。(中期目標M14 - 中期計画K44 と対応)

中期目標M14

研究の質の向上のために、研究成果に対する評価システムの改善を図る。

中期計画K44

研究成果に対する客観的な評価を行うことができる全学的な評価体制を確立する。

(5) 研究成果を社会に幅広く還元する。(中期目標M11 - 中期計画K34 と対応)

中期目標M11

優れた研究成果を挙げ、それを社会に広く還元する。

中期計画K34

優れた研究成果を学術専門誌、国際会議、国内学会等に公表するとともに、メディアを通して社会に積極的に発信する。

(6) 次世代を担う若手研究者の育成を図る。(中期目標M12 - 中期計画K36 と対応)

中期目標M12

人文・社会・自然の各分野の次世代を担う若手研究者を育成する。

中期計画K36

大学院学生を含む若手研究者の特定テーマに対する研究奨励のための資金と環境を提供する。

(7) 外部研究資金の確保を図る。(中期目標M16 - 中期計画K48 と対応)

中期目標M16

国、地方公共団体、産業界、民間団体等から多様な研究資金を確保する。

中期計画K48

科学研究費補助金やその他の競争的研究資金への応募件数を増加させる。

3. (組織の特徴・特色) 本組織では、人文学を学術基盤として位置づけ、人間の文化的、社会的、歴史的営為の諸相から人間精神の本質や基盤構造を明らかにし、これらの営みを、個別的な現象の把握と体系化との間で双方向的に理解することを重視している。また、基礎的な問題と先端的な問題、あるいは各専門分野に特化した研究領域と学際的な研究領域の双方に目配りし、研究の高度化と先端的分野の充実を通じた研究拠点の構築、研究と研究成果の還元における地域社会との連携、研究の国際化を図っている。

このような理念に基づき、小規模ながら人文学の各分野の研究者をバランスよく配置するとともに、研究組織を継続的に整備して来ている。平成12年には、大学院重点化を実施し、さらに学際的領域を開拓する大学院専任講座として、「比較人文学講座」を新設した。平成15年には、日本研究部門をいっそう強化し、中部地域における日本文化研究の核とするべく、「日本文化学講座」を新設した。

本組織における研究活動において、とりわけ特筆すべき点として挙げられるのは、テキスト研究の分野において、以下のように高度な研究拠点形成を着実に実現して来たことである。平成14年度採択の21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」を通じて、教育研究拠点の形成を推進した。さらに、こうして形成された拠点を継承し、平成19年度に採択されたグローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」において、高度な教育研究拠点の形成および若手研究者の育成に積極的に取り組んでいる。

[想定する関係者とその期待]

文学部・文学研究科の研究活動に対する第一義的な関係者としては、人文学各分野の学界や研究者を想定している。基幹的研究重点大学を支える一組織であると同時に、人文学各分野の研究活動の核となるような優れた研究者の集団として、高度な学術的研究成果を多数産み出すことに、関係者の期待はあると考えているが、21世紀COEプログラムに採択されるなど、これまでの実績から、関係者から寄せられる期待は一層高まっていると認識している。さらに、第二義的な関係者として、学生や知的関心を持つ社会を想定しており、上記のような高度な学術的研究成果に基づく知見を、さまざまな媒体や活動を通して、幅広く社会に還元することにその期待はあると考えている。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 研究活動の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 1-1 研究活動の実施状況

(観点に係る状況)

(1) 研究の実施状況

平成 16 年度以降、この 4 年間に刊行された文学部・文学研究科教員による研究論文は 386 編、著書は 130 冊、学会発表は 175 本にのぼる。教員数 61 人と比較的小規模の組織でありながら、多数の著書・研究論文が、基礎的分野、先端的領域、学際的領域のいずれにおいても、コンスタントに公刊されている点が注目される。特筆すべき点としては、人文学研究の本質的部分をなすような体系的な学術的研究成果を提示する学術的著作が多数見られることが指摘でき、継続的な研究活動が高い水準で実施されていることを示している。また、概説書、啓蒙書、教科書等、研究の成果や学術の動向を幅広く社会に還元する著作活動も盛んに行われている。さらに、学術書や論文の翻訳、新聞や雑誌における研究動向の報告記事、辞典等の編纂・項目執筆、マスメディアにおける取材協力など、多様な形態を通じて、教員による研究活動の成果を社会に広く還元している。【資料 I-1-1、I-1-2 参照】

文学部・文学研究科の教員が代表者となっている共同研究は 33 件実施されている。また、21 世紀 COE プログラム「統合テキスト科学の構築」(平成 14 年度から 18 年度)、グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」(平成 19 年度採択)を中心に、国際研究集会を 14 件、国内研究集会を 54 件主催しており、国内外の第一線の研究者とともに研究発表や共同討議を実施し、充実した報告書を刊行するなど、研究成果を世界に発信している。特に、「統合テキスト科学の構築」では、内外の著名な研究者を招聘して、計 11 回(平成 16 年度以降では 8 回)の国際研究集会を開催し、高い成果を挙げた。【資料 I-1-3、I-1-4、I-1-5、別添資料 I-A、I-B 参照】

文学部・文学研究科は、東海・中部地域の人文学の基幹研究拠点としての役割も果たしており、各専門分野において、地域に密着した学会・研究会を継続して主催している。また、COE プログラムでも、毎月 1 回、オープンレクチャーを開催し、最先端の研究をわかりやすく市民に解説する試みを重ねてきた。【資料 I-1-6、別添資料 I-C 参照】

東海・中部地域をはじめとする国内やアジア・アフリカ・ヨーロッパ等の国外において、文学部・文学研究科教員が統括あるいは参加した調査活動やフィールドワークは 47 件のほり、一次資料の開拓も着実に推進している。【資料 I-1-7 参照】

なお、平成 18 年度で終了した 21 世紀 COE プログラムは、平成 19 年度に実施された事後評価で、「設定された目的は十分達成され、期待以上の成果を得た」という高い評価を得た。

資料 I-1-1 教員の研究業績

年度	論文発表数	著書数	国際会議の招待講演	受賞数
16 年度	85 件	39 件	1 件	1 件
17 年度	99 件	33 件	3 件	3 件
18 年度	110 件	28 件	4 件	0 件
19 年度	92 件	30 件	1 件	1 件
計	386 件	130 件	9 件	5 件

資料 I-1-2 学会発表件数

16 年度	38 件
17 年度	43 件
18 年度	48 件
19 年度	46 件
計	175 件

資料 I-1-3 共同研究実施状況 (平成 16 年度以降)

経費	件数
COE	2 件
科学研究費補助金	21 件

総長裁量経費	3件
文学研究科プロジェクト経費	4件
その他	3件

資料 I-1-4 国際／国内研究集会開催状況

年度	国際研究集会件数	国内研究集会件数
16年度	1件	12件
17年度	5件	14件
18年度	6件	14件
19年度	2件	14件
計	14件	54件

資料 I-1-5 21世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラム国際研究集会一覧(平成16年度以降)

開催日	国際研究集会の名称	COE
16年 9月 16日-17日	歴史テキストの生成：テキスト／コンテキスト	21世紀
17年 1月 22日-23日	宗教美術におけるイメージとテキスト	21世紀
17年 10月 28日-30日	多重伝達形態論：人間の最も効果的な伝達手段を探る	21世紀
17年 12月 3日-4日	インド哲学における伝統と創造の相克：テキストとコンテキスト	21世紀
18年 10月 23日-25日	Histoire-Fiction-Représentation (フランス・プロヴァンス大学で開催)	21世紀
18年 11月 3日-4日	ソシユールとテキストの科学	21世紀
18年 11月 17日	歴史・地図テキストの生成	21世紀
19年 1月 20日	身体・儀礼テキストへの関係論的アプローチ	21世紀
19年 9月 7日-9日	英語歴史テキストの文献学的・文法論的研究	グローバル
19年 12月 14日-16日	バルザック、フローベール 作品の生成と解釈の問題	グローバル
20年 2月 9日-10日	テキスト解釈の中に人間のアイデンティティを探る	グローバル

資料 I-1-6 研究会実施状況 (平成16年度以降)

学会・研究会の名称	開催回数
名古屋大学中国哲学研究会	45
名古屋手紙の会	40
名古屋言語研究会	38
名古屋大学英語学談話会	35
近現代史研究会	26
名古屋タイ・雲南研究会	25
メタモ研究会	24
環境哲学研究会	21
六度集経研究会	16
The Seminar on English Poetry and Criticism	12
中世唱導文献研究会	12
日本沙漠学会沙漠誌分科会	9
名古屋大学国語国文学会	8
南アジア近世史研究会	8
政治経済学・経済史学東海部会	7
名古屋大学西洋中世史外国人研究者講演会	7
名古屋大学哲学会	4
名古屋大学印度学仏教学研究会	4
名古屋大学東洋史研究会	4
名古屋大学英文学会	4
新発見の栄西著作研究会	4
西洋古典研究会	3
ヨーロッパ基層文化研究会	3
日本フローベール研究会	3

資料 I-1-7 調査・フィールドワーク実績 (平成16年度以降)

実施国	件数
日本	18
アメリカ	1
アメリカ、イギリス、オーストラリア	1
アメリカ、シンガポール	1
イギリス	2
イギリス、タイ	1
イタリア、スペイン、チュニジア、ポルトガル、モロッコ	1
インド	1
エジプト	1
エルサルバドル	3
エルサルバドル、ホンジュラス	1
カナダ	1
カメルーン	1
韓国	1
ケニア	1
タイ	1
タイ、ラオス	1

名古屋大学文学部・文学研究科 分析項目 I

中国	6
パキスタン	1
フランス	1
メキシコ	1
ラオス	1

別添資料 I-A 21 世紀 COE プログラム「統合テキスト科学の構築」
 別添資料 I-B グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」
 別添資料 I-C COE プログラムオープンレクチャー実施一覧

(2) 研究資金の獲得状況

平成 16～19 年度の 4 年間に、文学部・文学研究科教員を代表者として申請し採択された科学研究費補助金は資料 I-1-8 のとおりで、申請率は 90% 台を維持し、平成 20 年度分については、申請率 100% を達成した。採択率も、平成 19 年度には 70% 近くに達している。また、毎年 1 件ずつ基盤研究(A)が新規に採択されているように、採択された研究課題の中には大型の研究プロジェクトも含まれている。【資料 I-1-8 参照】

研究拠点形成のため、国家的予算措置として配分された経費についても、21 世紀 COE プログラムに続いて、グローバル COE プログラムに採択され、学内の文系の研究拠点として着実な成果をあげている。また、受託研究・寄附金等の外部研究資金の獲得にも努めている。名古屋大学内の競争的資金である総長裁量経費に採択された研究課題のうちの一部は、その後、科研費等の競争的資金の獲得につながった。文学研究科独自の取り組みとしては、将来、競争的な研究資金を獲得する可能性がある萌芽的な研究の助走的資金として、また、中核的研究拠点の形成や若手研究者の育成を図るため、運営費交付金から配分された研究費の一部を、研究科内で公募した研究課題に、文学研究科プロジェクト経費として配分している。配分を受けた研究課題の多くは、その後、総長裁量経費や科研費などの競争的資金を獲得しており、十分な成果を上げている。【資料 I-1-9、I-1-10 参照】

資料 I-1-8 科学研究費補助金採択件数及び交付金額

年度	採択件数	交付金額(千円)
平成 16 年度	34	74,980
平成 17 年度	33	66,830
平成 18 年度	34	76,430
平成 19 年度	43	92,168

【出典：文系経理課記録】

資料 I-1-9 研究拠点形成のために配分された国家的予算措置一覧

予算区分	プログラム名	代表者	研究期間	交付金額合計(千円)
21 世紀 COE	統合テキスト科学の構築	佐藤彰一	平成 14-18 年度	296,740
グローバル COE	テキスト布置の解釈学的研究と教育	佐藤彰一	平成 19-23 年度	66,690
「魅力ある天学院教育」イニシアティブ	人文学フィールドワーカー養成プログラム	周藤芳幸	平成 18-19 年度	21,862

【出典：文系経理課記録】

資料 I-1-10 外部資金獲得状況

年度	種別	研究内容	代表者	金額
平成 16 年度	受託研究	猿投神社聖教典籍目録編纂に関する研究	阿部泰郎	1,000,000
		男性の性意識に関する実証的研究	和崎春日	2,100,000
平成 17 年度	寄付金	21 世紀 COE 採択分にかかる事務支援	佐藤彰一	3,276,900
平成 18 年度	該当無し			
平成 19 年度	外国人著名研究者招聘事業		佐藤彰一	3,418,030
		「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業	嶋田義仁	4,999,238
	寄付金	(財)住友財団 環境研究助成	伊藤伸幸	1,000,000

【出典：文系経理課記録】

観点 1-2 大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

(観点に係る状況)

該当なし。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由) 本組織は、基幹的研究重点大学を支える一組織であると同時に、日本における人文学研究の有数の拠点であり、関係者からの期待は非常に高いが、人文学各分野の研究活動の核となるような優れた研究者の集団として、21世紀COEプログラムやグローバルCOEプログラムに採択されるなど、高度な学術的研究成果を多数産み出しており、活発な研究活動を通じて、人文学各分野の学界や研究者からの高い期待にも十分に応えている。また、上記のような高度な学術的研究成果に基づく知見を、さまざまな媒体や活動を通じて、幅広く社会に還元しており、関係者の期待に応えている。こうした状況から、研究活動の状況は期待される水準にあると判断される。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

(1) 観点ごとの分析

観点2-1 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)

(観点に係る状況)

文学部・文学研究科では、人文学の分野で、基幹的総合大学にふさわしい学術的成果を産み出す研究拠点を形成することを、組織の第一義的な研究目標として最も重視している。文学部・文学研究科の教員数は61名と決して多くはないが、本組織の特徴をなす人文学諸分野の基礎研究および現在推進している先端的・学際的研究領域における研究論文や著書の中には、当該分野において世界的な水準の研究者から構成される編集委員会に選定されたもの、当該分野を代表する学術的な雑誌や学会誌に掲載されたもの、権威ある学術賞を受けたもの、学術的に権威ある評価者によって書評されたものなど、人文学各分野の学界や研究者からの評価が高い研究業績が多数含まれている。中でも、文学部・文学研究科を代表する優れた研究業績として選定した業績のうち、学術的意義において卓越した水準にあると判断した5点の業績は、哲学(業績番号1001)、インド哲学(業績番号1003)、西洋史(業績番号1019, 1020)、フランス文学(業績番号1007)の分野で国際的に極めて高い評価を得ている。また、同じく、学術的意義において卓越した水準にあると判断したもう1点の業績(業績番号1016)も、日本史の分野で高く評価されており、研究業績として群を抜いている。これら6点が、いずれも、21世紀COEプログラムおよびグローバルCOEプログラムの推進担当者の業績であることは特筆すべきであり、学術的意義において優秀な水準にあると判定した11点にも、COEプログラム推進担当者の業績(業績番号1004, 1010, 1011, 1013, 1018)が5点含まれることと併せ、COEプログラムを通じ、本組織において重点的に研究拠点の形成を推進してきたテキスト研究の分野において、高度な学術的研究成果が上がっていることを示している。また、卓越した水準にあると判定された業績のうちの2点(業績番号1007, 1016)および優秀な水準にあると判定された業績のうちの3点(業績番号1008, 1012, 1014)は、准教授・講師層の若手教員による業績であり、このことは、文学研究科における研究活動が職位や世代の別なく活発に展開され、高い成果を上げていることを裏付けている。

一方、本学部・本研究科では、こうした高度な研究成果を広く社会に還元することを第二の研究目標に掲げており、社会、経済、文化的意義の高い業績として、複数の書評で取り上げられたり、権威ある賞を受賞したり、あるいは版を重ねるなどした定評ある啓蒙書や概説書も多数ある。その中から、社会、経済、文化への貢献が優秀である業績として選定した計4点のうち3点(業績番号1006, 1017, 1021)は、COEプログラムの推進担当者の

名古屋大学文学部・文学研究科 分析項目Ⅱ

業績であり、COE プログラムが最先端の研究に取り組むだけでなく、その成果の積極的な還元を努めてきたことを示している。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由) 本学部・本研究科が第一に掲げる研究目標に対応して、代表する研究業績が示すように、学術的な意義のある高度な研究成果が多数上がっている。また、21世紀COEプログラムによってテキスト研究に特化した研究拠点が形成され、その分野でも優れた学術的研究成果が上がっている。このように、研究成果の状況は良好で、本学部・本研究科が想定する人文学各分野の学界や研究者といった関係者から寄せられている高い期待にも、十分応えていると判断される。さらに、本学部・本研究科が第二に掲げる研究目標に対応して、研究成果を幅広く社会に還元するような業績も多数あり、代表する研究業績が示すように、研究成果の状況は良好で、本学部・本研究科が想定する、学生や知的関心を持つ社会一般といった関係者の期待に十分応えていると判断される。こうした状況から、研究成果の状況は関係者によって期待される水準にあると判断される。

Ⅲ 質の向上度の判断

①事例1「21世紀COEを活用しての高度な研究拠点の形成」(分析項目Ⅰ、Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取組)

本組織では、言語、思想、文学、芸術などの人文学諸分野を横断するテキスト研究を重点領域として位置づけており、平成14年度の採択から平成18年度の完了に至るまで、継続して高度な研究拠点の形成に取り組んできた。その結果、法人化以前と比較して、以下のような質の向上が見られる。①テキスト研究の分野で、水準の高い学術的な研究成果を多数上げている。②世界最高水準の研究者を招聘し、国際研究集会を多数開催し、研究成果を発信した。③若手研究者の育成に取り組んだ結果、大学院生を含む若手研究者の研究活動が活性化し、研究論文や学会発表などの研究発表数が向上している。【資料Ⅰ-1-5、別添資料Ⅰ-A、Ⅰ-B参照】

②事例2「科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金の獲得状況の改善」(分析項目Ⅰ)

(質の向上があったと判断する取組)

本組織では、活発な研究活動を支える財政基盤として、科学研究費補助金を中心とした競争的な研究資金の獲得状況の改善に取り組んできており、法人化以前と比較して、申請率、採択率とも、飛躍的な向上が見られた。【資料Ⅰ-1-8参照】

③事例3「文学研究科プロジェクト経費を活用しての研究の活性化と若手研究者の育成」(分析項目Ⅰ)

(質の向上があったと判断する取組)

本組織では、将来的に競争的な研究資金を獲得する可能性がある萌芽的な研究の助走的資金として、また、COE等の中核的研究拠点の形成や若手研究者の育成を図るため、運営費交付金から配分された研究費の一部を、文学研究科プロジェクト経費として、研究科内で公募した研究課題に対して配分している。法人化後に開始したこのような取組によって、研究活動の活性化、若手研究者の育成などの面で、質の向上が図られている。